

はじめに

- ・江戸時代の産むこと・育てることをめぐる男と女
桃太郎話にみる男と女(八束郡:現松江市の場合)
←農民の「家」と夫婦かけむかひの労働
- ・江戸時代:「遊郭」=「遊所」が各地に出来、買売春が本格的に展開した時代
「家」と「遊所」の二元化とは?男と女の関係とは?

1、町人の日記『おぼえ日記』を読み解く

1) 性と生殖の問題を中心に

出産、遊女の焦点化

- ・『おぼえ日記』をめぐる二つの仕事

①松原祥子『松江城下に生きる—新屋太助の日記を読み解く—』(松江故郷文庫9、松江市教育委員会、2010年)

②内田文恵「女性の暮らし」(乾隆明編著『松江開府400年 続松江藩の時代』山陰中央新報社、2010年所収)

2) 『おぼえ日記』の概要

- ・江戸後期:文政9年(1826)~嘉永7年(1854) 全部で4冊

日記の著者、太助:47歳~72歳

1冊目「日記」:文政9年9月16日~(天保9年9月26日に見つけ、今後の戒めにと残す。

飛び飛びに残ったそのままをとじる。):とびとび

2冊目~4冊目(弘化5年(1848)正月~嘉永7年(1854)12月):毎日の日記

- ・太助の日記の視点:男と女の両方への視点【①】(文政9年10月14日)

3) 太助と新屋

出身地は西代(現 出雲市西代町)

寛政5年(1793)11月7日、14歳で新屋へ奉公に

文政9年(1826)頃、和多見の新屋良左衛門に仕える、妻きよは18歳年下(茶町、三好屋の娘)、きよも新屋で洗濯、炊事、内方(主人の妻)の世話など

2、『おぼえ日記』にみる産むこと、育てること

1) 二人の息子

- ・長男・安蔵

文化2年(1819)出生(太助、40歳、きよ22歳)、「三十三年以前ハ今夜六ツスギ安蔵本家

之土蔵ニテ生レタル故安蔵ト名附タル事ナド思ヘハ涙ニ暮申候」(嘉永5年[1852]10月26日)→27歳で死去(弘化3年7月13日)

- ・次男・政次郎

天保3年(1832)出生(太助53歳、きよ35歳) *出生間隔6年(安蔵は13歳)

(天保3年閏11月14日→嘉永4年8月21日 旧記改より)【②】

朝のうち、きよが出産、きよの母が介抱に来てしばらく逗留。3日目に名前を政次郎とつける。この子は生まれてから乳も飲まず、ウブハキも食わず、ただ目ばかりクルクルとして人間にはならないものと思った。5日目には少しウブハキをじわじわと飲み、それから乳も飲んだが、いたって小さな子どもであった」

*出産の手伝いは実家の母、乳を飲まない、小さな子:「人間ニハ不相成者ト心得候」と言う赤子観に着目、「ウブハキ」とは?【③】

2) お嬢様の誕生儀礼

- ・和多見屋おたけの誕生儀礼

嘉永4年(1851)11月28日:内方が妊娠7か月、帯祝(産婆)、きよが雇われ洗濯、料理。

嘉永5年(1852)1月23日:前年に和多見新屋の主人となった三郎次の妻が出産、太助、政次郎、夫(男たち)も出産に関与(夜伽?)、安産

1月25日:生後三日目に名づけ、「おたけ」

1月27日:産着(「竹に雀」の藍染を贈呈)→祝儀

1月29日:お七夜(→赤飯)、2月1日:和多見新屋の親方から産着の礼(きよの働き)

閏2月13日:お宮参り(生後51日目、氏神に参拝)きよが抱く。

閏2月26日:初雛(6人の仲間、雛を和多見屋に、太助は産着で奮発、出費は抑える)

3月26日:植痘瘡(藩主、松平斉貴、種痘に先見の明)

4月3日:食い初め 生後100日(きよ、早朝から詰める)、太助、「取上祖母」、医者に膳

*太助、きよ:主人の「家」の維持・存続に関与(本家安産の語、頻出)

誕生儀礼の階層差

3、『おぼえ日記』にみる遊郭、遊女

1) 松江城下の遊所

- ・松江城下の場合:売女禁止の触【④】

- ・松江城下の遊所、遊女

和多見町:遊所:和多見の置屋と遊女名【⑤】(文政9年[1826]11月2日)

「売淫婦を雇い入れた店家を、饅頭屋とも称へていた」(『旧松江市誌』880頁)

遊女の実数は不明:幕末の鎮撫使事件の際の一行接待

「酌婦は和田見、杵築之遊女凡三四十人も罷出、昼過より夜半迄御酒宴・・・」

(「滝川御用留」)『美保関町誌』上巻、1986年、357頁)

2) 買売春の広がり

- ・遊女の階層化と私娼婦の広がり一呼び名の相違(遊女、売女、酌取女、下女)
→買う男たちの階層の広がり(ex 上級藩士～町人、職人)、太助の遊所通い【⑥】
- ・性のみが売買の対象になる場合も増加: 近世の売春現象の凄惨さの一端
天保3年4月21日、隣家紺屋兵兵衛、福村屋に行き、遊女を葬す。銭にて買い、俄に
疝氣起こりたる由(嘉永4年(1851)8月21日)太助と兵平衛の母が行き遊女を弔

3) 買売春のなかの女たちの身体と心

- ・遊女の逃亡、心中、折檻と遊女のいのち
嘉永元年(1848)4月7日: 置屋、魚屋宗助抱えの梅竹逃亡→寺町の八尾梅が隠す
嘉永五年(1852)6月12～14日: 塗師、清十俵の虎、塗師仲間菊五郎の家で出会い、
中嶋屋の遊女千鳥と心中はかる。千鳥の喉首に刃物、虎は怖気づき逃亡、清十が番
所へ
嘉永2年(1849)10月7日: 中嶋屋戸蝶(売女)逃亡、売女を残らず集め打擲
文政13年(1850)7月14日: 嶋屋玉ノ井(売女)、逃亡、折檻←新屋二階で「見物」
「廓の明け暮れ」【⑦】『世事見聞録』
*折檻、打擲についての太助の記述: 「見物」≠遊女への同情、共感
和多見浄心寺の過去帳(『旧松江市誌』683頁)
文化12年5月3日「安貞穩信女、筆治抱女ヲムロ事二十二歳ニテ死す」
- ・遊女屋(遊女?)の意識: 武士はお断り?
嘉永5年(1852)4月26日: 稻生田鉄五郎様、菰部幾三郎様に売女のこと頼まれ、湯町
屋亀方へ行き頼むが「御家中様は断り致し候由にて相止め」

4) 遊女の背景

- ・遊女の供給源と年季: 【⑥】、米子、安来、大坂など、5～6年の年季奉公(太助は置屋嶋
屋善四郎の願書、遊女抱え奉公請状、下女奉公請状、奉公手形請状なども代筆)
神門屋市五郎への奉公人受状(『美保関町誌』上巻、1986年、371～2頁)

おわりに

- ・近世後期: 「家」の維持・存続への意識の高まり⇒子どものいのちへの関心の高まり
- ・性の世界: 「家」と「遊所」の二元化
「家」の存続のための性=生殖のための性、「遊所」=快楽のための性の分離
売られる女と買う男(商品としての性: 女の性、商品として値踏み(ex 年増))
- ・男と女の性規範の二重性
男: 「家」と「遊所」を行き来、女: 「家」か「遊所」に固定/遊所奉公と家
- ・一方で働く女の姿も(「家」の維持と女の働き)